

## 随筆部門選評

「今年も味わいのある作品が数多くあるぞ。」

応募いただいた作品のタイトルを読み、こんな思いが心から湧き出しましたが、やはり予想通りでした。

今年も作品を書いて頂いた方の多種多様な経験、生き方、考え方、そして何より、前向きに人生に対峙しておられるに姿に強く感動を頂きました。また、昨年度文芸祭が中止になっていたこと、コロナ禍で自由に身動きできないこと、オリンピックが開催されたことなどが絡まり合い、より作品と向かい合っただけでじっくり書かれた方が多かったように感じました。

今年度の応募は、十八作品でした。今年度からオンラインによる応募も開始になりましたが、十作品がオンラインによるものでした。時代の変遷を感じました。その中であって、二作品が手書きによる応募でしたが、書かれた方の姿が見えるようで、また違った味わいがありました。内容は驚くほど多岐に渡っており、どの作品も確かな筆力を基に、読み応えがあり、甲乙をつけるのが難しくもありました。とりわけ、構成を工夫し巧みに話を展開された方、文末表現を工夫し、切れ味よく、軽快に話を進められた方など、自分の思いが読み手に伝わるよう工夫が凝らされていました。

これだけの表現力、筆力がある中、少し残念に思うこともありました。一つは、話題が豊富であるが故の課題です。読む分には興味深く読むことができるのですが、話題が多いため、一番書きたい内容が曖昧になってしまっているのです。もう一つは、前項とも関係しますが、物語風になっってしまうことです。話としては読み易いのですが、ふと立ち止まって考えてみると、何が言いたいのかが不明確になってしまっているのです。

今年度も広域でしかも幅広い年齢層から応募いただきました。県内から十一人（大垣市内一点）、県外からは七点ありました。年齢別では、八十代一名、七十代三名、六十代九名、五十代二名、四十代二名、二十代一名でした。

選外にはなりませんが、松宮信男さんの「光秀幻想」は脚本家を目指した二人の希望と切なさの重なるもので、読み応えのある内容でした。中原健治さんの「記憶の後始末」は痴呆となった叔母の姿をもとに現代社会の暗く悲しい縮図を、客観的に描いた作品でした。考えさせられ

る内容でした。よく調べて書いておられると感じさせられる作品が何点ありました。西谷寿さんの「古代の国際化について」、樋口健司さんの「丘の桜」などがこれにあたります。また、「言葉」にかかわる楽しさや大切さを感じさせる作品も何点ありました。

どの方も様々な工夫を凝らし、よりよい作品を作り上げようとされています。真摯な取り組みに心から敬意を表すとともに、来年度も生活を見つめた感動ある作品の応募を期待します。

文芸祭賞 「年輪不詳の手」

大野美沙恵

人生を共に生きた年輪の入った大きな手。波乱万丈の人生を支え続けた手。その手をしじみと眺め愛おしむ。手を通してストーリーが展開し、生き生きと生き抜いた筆者の姿が見事に描き出されています。

秀作 「釘刺しか鍋茹でか」

竹村 京子

苦手なサザエの調理に挑む姿がユーモラスに描かれています。サザエの描き方、色、調理の手順等、構成力や描写力があり、話がテンポよく展開し、思わず作品に引き込まれてしまいます。

佳作 「打ち終えた後の」

石田 真一

「そば打ち」を授業に取り入れた筆者。そばを打つという行為に新鮮さや魅力を感じる生徒たち。その姿を温かく見守る筆者。授業を通して、現代の子どもたちの姿を深く考えています。

佳作 「数字と価値」

佐々木 凌

機械による歌の点数化を話題の中心据え話が進みます。数字は商業的データの一つであり、数字の向こう側にある本質を見出す力こそ感性であるという主張は、現代社会の風潮を厳しく戒めています。

佳作 「早朝の至福のコーヒー」

安藤 邦緒

思い出の詰まった書齋での早朝の至福のコー

ヒータイムを話題の中心に据え、至福の時間と関わらせながら人生を振り返り端的に話を進めています。思いが素直に表現されており、読み易い作品になっています。

審査員

大石 英文  
今津 佳代子

## 詩部門選評

いつも詩の視点をもつ日常がひろがっているとい。それは特別なフレームのついた絵画になります。日々は危うさや不安や心細さの心の揺れがあり、翳りのすきまから時として明る陽の差し込むような気もします。今回は52篇あり、詩のドラマに恵まれました。

## 文芸祭賞 『湖底』

― 舟の幻影を見た ―

湖底に沈む黒い船の影はまるで湖を支配しているような重厚な奥ぶかさをもった存在感で出現しています。〈湖底〉それは光の届かない水圧の強い場所です。ヒトの心の奥底に内在する黒い影と共通します。現代人の前にそれは啓示として出現し、戒めるものではなく母体としての存在で居ます。

## 秀作 『荒野の星』

― 人の嘆きが星を輝かせている ―

荒野にいる少年の心は孤独をかかえているからこそ、騒めきから離れた静けさで夜空を見上げることができます。誰しもが感知する生きとし生きるものの孤独の寂しさの境地を切々と伝えてきます。

## 秀作 『海老を買いに』

生き生きと臨場感が伝わり、眼前にその情景が在り在りと浮かびます。マスク、免許返納、鼻水などリアルさで迫ります。

― お前たちも何の因果か知らんが ―  
わしらの腹の中に納まってしまっやんなあ喰うものと喰われるものの食物連鎖です。この世の因果は奥深い。

## 佳作 『夕方』

詩情ゆたかに展開していきます。振りまわされる自己との感情に自問自答しながら、終連は、― あなたのおもりはごめん ― と言い切る決断の言葉の終り方に、強い意志が表現されています。

## 佳作 『変わりゆくもの』

街でよく見かける光景です。繁栄していたパチンコ店の廃墟を「孤独」と名付けたのがいいです。たえずその行間には風にゆれる雑草があり、減じるものと逞しく生きのびるものの情景の対比が印象に残ります。

## 佳作 『ふたり』

― みずいろの少女が言う ― と、淡い青春の想い出の欠片の終連は

― いのちはつづく／やわらかにつづく ―  
欠片のことに重み加わります。

## 佳作 『箱』

現代人の孤独を巧みに捉えています。その着想は、仮面ではなく箱でした。

― ベランダにも休んでいる空っぽの箱 ―

## 佳作 『気づかないふりをして』

リアルに表現されたこの事象は、世界の不条理のカラクリと密かにつながっています。その洞察力の深い視線を黙すること、この世を生きる術として「ふり」は強い共感を得ます。

## 佳作 『蝉と私の声』

蝉はよく作品化しているテーマです。

― 鳴くつて決めたんだ ― と強い口調の決心の心の声が、短い一生を終える蝉の寂しさと儚さとのストリートさが読み手に近づいてくる。

## 佳作 『遠い雨』

題名がいいです。遠い母の背にも雨がふると終連で結んでいます。ひたすら走りつづけた少年の夢は届いたのだろうか。母の存在は尊く、逃げられない心のふるさとです。

審査員

富長 覚  
椎野 満代

## 短歌部門選評

今回は応募者の約半数がオンラインでの投稿であった。

選者にとってオンライン作品の審査は初めてのことで、目新しいことばかりであった。

投稿歌の内容は生活詠が多く、端的に内容を詠い上げた歌が多かった。

今後は生活詠のみならず人生詠、自然詠、社会詠など幅広く挑戦していただきたいと感じた。

### 審査員

山本 次能  
栗山 繁

## 俳句部門選評

昨年は（コロナ禍）文芸祭が開催されず残念でした。

今年も厳しい状況ではありましたが、みなさんのご理解を得て、三一六名、九一八句のご応募をいただき、ありがとうございます。

例年のように講習会は開かれず喜びの声や、ご意見をお聞きすることは出来ませんでしたでしたがご了承ください。

文芸祭賞の 秋出水の句 水難の歴史を忘れず  
今でも輪中に生きる人たちの志が書かれているな  
と思えました。

今年米の句、高齢化とともに将来の農業のあり方が問われる句、手の平の蛍を見つめる姿、古本の値踏みとすいっちゃん、そして 古民家と秋の風の取り合わせの妙味、白靴、十八歳、投票、若者の現代を遺憾なく切り取る一句、シヨベルカーとかき氷 小学生ならではのフレーズに感心、大根干すは 伊吹嶺の風で地の雰囲気を出すなど、気取らず素直な表現の句が多くよかったと思います。

（小中生の部が文芸祭では切り離されて、一般の部と統合されましたが、数編の応募ありがとうございました）

### 審査員

田中 青志  
森田 かずを  
大堀 武直  
名和 永山

## 川柳部門選評

今回からオンラインでの投稿ができるようになり、参加者が大幅に増加しました。これは、主催者や選者にとつては喜ぶべきことです。きつと参加者の平均年齢も下がったのではないかと思います。しかし同時に短詩文芸の特徴を構成している七五調のリズムが意識されなくなってきた気もします。

皆さんは、古文にせよ現代文にせよ、受験用かも知れないが出だしを暗記している作品を幾つか持っているでしょう。口から出てくるときは何故か大方が七五調のリズムで詠んでいることに気が付くと思います。

それが、日本語が本来持っている韻の特徴です。川柳に限らず、短詩文芸と言われるものが長い歴史を維持しているのはそのお陰だと思えます。自分が創った句は、ぜひ声を出して読んでみましょう。五七五の大切さが納得できるようになります。

### 審査員

武山 博  
草野 稔